

自分の最期を考える時

社会福祉法人ぶどうの枝福祉会

愛の園 統括園長 信川恒夫



私の祖父は住み慣れた自宅で、家族に看取られながら亡くなりました。昭和三四年のことです。すなわち昭和三〇年代は、それぞれの家で最期を迎える方がほとんどでしたが、昭和五一年にはその割合が逆転し、現在は病院で亡くなる方が八〇%に及びます。

高齢者で入院が長く続き、特に認知症の方は、口から食べ物を飲み込む反射が著しく低下しています。そして、無理に食べようとすると、誤って気管に食べ物が入って、肺炎を起こします。これを誤嚥性肺炎と言います。入院して抗生物質や強心剤を使って、肺炎は治りますが、嚥下障害自体は治りません。病院では点滴を付けますが、何時までも置く訳には行かないので、胃ロウを付けようと医師から提案があります。認知症の方は、「そんなことはして欲しくない。私はもう寿命なので、もう結構です。」とは言えません。家族も嚥下障害があるだけで、死なせたくなきありません。そして、家族は医師から言われてやむなく、胃ロウの手術を受けます。

今の時代は、自分が望むような最期を迎えられない時代になっていきます。しかし、一方で病院ではなく、愛の園で最期を迎えたいと希望される方が増えてきています。私もご家族とお話し合いをする中で、積極的な医療を望まない方には、

愛の園での看取りを勧めています。

「穏やかな心は、体の命。激しい思いは骨を蝕む」

(箴言一四：三〇)

胃ロウによらないでは、三日もたないと医師からの宣告を受けた方が、愛の園に帰ってこられ、笑顔で何ヶ月も過ごされている事例があります。時間がかかりますが、自分の力で食べ、見る見る回復していくのです。家族は信じられないと言われています。人は医療により延命するのではなく、ご本人の生きようとする気持ち、危機的状態をも克服することです。まさしく、人の寿命は神様の御手にあることを私達は忘れてはなりません。

「生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。」

(伝道者の書三：二)

愛の園の入所者が食べられなくなってからの最期の数日間、少しの水しか体に入っていないのに、尿が出ます。まるで、自分の体を整理整頓しているようです。そして、眠るように息を引き取られます。ちょうど木が枯れるかのようです。

しかし、楽に自然に逝けるものを、病院では点滴や経管栄養、酸素吸入で無理やり頑張らせます。その結果、顔や足は水膨れです。そして、心臓や内臓に大きな負担をかけるので、苦しまなければならなくなります。病院で亡くなる方と愛の園で亡くなる方とは、体重は何キロも違います。特養愛の園は施設での看取りについて取り組んできました。その結果、最近では病院に搬送されて亡くなる方が減り、愛の園で家族に囲まれながら亡くなる方が増えてきました。

今こそ私たちは入居者のみならず、自分自身の最期をどうしたいのかを、あらためて考える時ではないでしょうか。